

大宰府の対外的機能(2)

「海商の登場」

ページID…7241

奈良・平安時代初期における日本の対外関係は外交使節の往来がその主流でした。その中で、大宰府は本年4月号で紹介したように、律令に定められた蕃客・帰化・饗識という規定に基づいてその対外的な役割を果たしていました。

しかしこの使節外交にも変化があります。朝鮮半島の新羅との外交では、日本への新羅使派遣は奈良時代末が最後です。日本からの遣新羅使も同時期が最後となります。ただ、これらの事実は結果論でありません。その時期の歴史的経緯を跡づけると、最終的に新羅との国家間の通交が全く期待できなくなるのは平安初期の承和年間（834～847）と考えられます。一方、中国への遣唐使も寛平6年（894）の菅原道真の進言によって派遣が沙汰止みとなり、自然消滅してしまうのです。

こうした事態と入れ違うように、海を渡って交易に携わる商人たち、すなわち海商が登場してきます。9世紀前半のことです。記録のうえでは当初は新羅商人、のちには唐商人とみえますが、日本が新羅商人の排除に動くこともあってその自称を変えた可能性があり、両者に大きな差

異はなかったとも考えられています。

ここで東アジア世界に目を転じると、十世紀は激動の時代と呼ばれています。その最大の要因は、東アジア世界に大きな影響力を及ぼし続いていた唐帝国が907年に滅亡したことです。その後、中国大陆は五代十国という分裂の時代に入ります。

これに連動するように朝鮮半島でも、統一新羅の弱体化とともに、9世紀末～10世紀初頭に後百濟、後高句麗の建国があり、やはり後三国時代と呼ばれる分裂の時期を迎えます。日本においても、天慶の乱（平将門の乱・藤原純友の乱）が勃発、従来の律令国家による支配体制に大きな打撃を与え、武士階級の誕生を促しました。また摂関政治が常態化して、新たな国家体制が出現することにもなりました。

このような唐の滅亡に端を発する10世紀の激動を東アジア世界の画期として捉える見方がありました。一方で東アジアの対外関係を考えるとき、唐の滅亡よりもむしろ先に述べた海商の登場を重視すべきとの見方が提示されており、私もこれに賛成です。それではこの海商の登場によって大宰府の対外的機能はどのように変化していったのでしょうか。次回（12月号掲載予定）はこのことについて述べたいと思います。